

2022年12月18日 半田朝礼拝

午前 10時30分

司会 牧之瀬俊彦

奏楽 橋本 恵

前 奏

招 詞

マラキ書 第3章1節

讃美歌

讃美歌 21-236-4 (見張りの人よ)

交 読

詩編第131篇 (讃美歌 21 p. 146)

祈 禱

聖 書

マタイによる福音書の第25章1~13節

(新約 p. 49)

讃美歌

讃美歌 21-237-1 (聞け、荒れ野から)

説 教

まずここで述べられているのは、婚宴の喜びです。

花婿を花嫁の代りに出迎えるのでしょうか。十人のおとめが、おそらく晴れ着を着て、その迎える準備をしています。それぞれがあかりを用意します。あかりを整える時にも、晴れ着を着

る時にも溢れていたに違いない、このおとめたちの笑いさざめきが聞こえてくるような場面です。イエスさまはご自分の死が近づいてくる時、その死との結びつきで、弟子たちに、そして弟子たちが続いて教会に生きるわたしたちに、この喜びを知るようにと勧めておられます。喜びを迎える。ついに花婿がやって来た時に、歓声をあげて出迎えに行きます。しょんぼりではありません。歌でも歌って飛び出していくのです。「おめでとう、よくいらっしやいました」。そして、直ちに婚宴が始まります。

この十人のおとめの譬えは、細かな詮索をすると、ややこしい理解の違いが出てくるかもしれませんが、イエスさまがお語りになったのは、その大筋を捕えてもらうためですし、その筋道ははっきりしています。子どもにもよく分かります。十人のおとめが、花婿を迎える務めが与えられていました。そこでイエスさまは最初に、こう言われました。「そのうちの五人は愚かで、五人は賢かった」。もっと言えば、「愚かなおとめと賢

いおとめ」の二組がいたのです。この賢さと愚かさの違いはどこに表れたのでしょうか。ともし火を用意していたけれど、そのともし火を絶やさないための油を用意していなかったところにあります。賢いおとめたちはその反対でした。

このおとめたちは、花婿の来るのを一日中待っていました。日が暮れて夜になって、夜が更けても現れないので、とうとう眠り込んでしまいました。真夜中に「**花婿だ。迎えに出なさい**」と叫ぶ声がして一斉に飛び起きましたが、準備ができていた賢いおとめたちは、赤々と燃えるあかりを用意することができましたが、十分な用意がなかったおとめたちは、消えかかるともし火を手で覆うようにして、なんとかして油を分けてくださいと頼みます。けれど、断られてしまいます。やっと用意ができて、婚宴の席に駆け付けた時には、戸が閉められていて、その婚宴の席にあずかることができなかったという物語です。

「賢い」と訳されている言葉は、「目を開けている」、「開かれた目を持つ」という意味を持っています。最後の13節に、「だから、目を覚ましていなさい」とイエスさまが最後の警告を発しておられることから言っても、そのことは明らかだろうと思います。

先ほど、この譬え話はとても分かりやすいと申しましたが、実は誰が聞いていても、「おやっ」と思うところがひとつあります。それは、「目を覚ましていなさい」、賢いということは目をさますことだと言いながら、この賢いおとめたちは、五人の愚かなおとめたちが眠っている間どうしていたかと言えば、同じように彼女たちもまた一緒になって眠っていたということです。「皆眠気がさして眠り込んでしまった」のです。この「眠気がさして」というのも、実際に、眠くてもうどうしようもなくうつらうつらして、とうとう、こっくりこっくり、眠り込んでしまうという意味の言葉です。そうであれば、十人とも眠ってしまったことになるのではないか。「目を覚まして」というの

は、どういうことなのかということになります。そうとすれば、ここで明らかなことは、いつ呼び起こされても、用意ができていたような眠り方をしているか、ということのようです。

この十人のおとめたちは、皆居眠りをしてしまいます。居眠りをするのは、わたしたち人間の<弱さ>かもしれません。けれどその人間の弱さを、イエスさまは決して否定なさいません。眠くなった時に、それでも一所懸命に目を開けている、というほとんど超人的な努力をなささい、とイエスさまがおとめたちに要求なさったわけではありません。そうではなくて、人間の弱さのために、居眠りしてしまうような時にも、「起きなさい、キリストが来られる」、その言葉を聞いた時に、喜んで目を覚まし、主が求められるともし火を持って、立つことができるか、ということが問われています。

ヨーロッパの教会によっては、教会の入り口にこの譬え話を彫刻で施しているところが少なくないようです。たとえば

半田教会の入り口にこういうものがあつたらどうでしょうか。

左側のおとめたちは、明かりを用意していたから、みなにこにこして、とても嬉しそうな表情をしている。そして反対側の五人は、悲しそうな顔をして、中にはもうちょっとで泣き出しそうな、目から涙が、ぽろぽろ落ちてきているような顔をしています。中世以来教会の人たちは、この入口を通る時に、そのたびに、自分がイエスさまにお会いする日のことを、思い起こしたに違いないと思います。右を見て、左を見て、自分はいったい、どちらに立つのだろうか、もう一度改めて、自分を振り返ることができたのではないだろうか。教会堂の入り口に入っていく時に、イエスさまの姿を仰ぐのです。イエスさまは最後に、「目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから」とおっしゃいました。いつお目にかかるかわからない。だから、毎日曜日教会に来ては、「いつお目にかかるかわからないけれども、イエスさま、わたしはあなたをお待ちしています」と、待つ姿勢を整えました。

わたしたちが教会の礼拝に集まって来る一つの意味、そして、クリスマスを迎える準備をする意味は何かと言えば、「あなたがたは主イエスを迎える用意ができていますか」ということです。このことは、ただ再臨のための準備というだけではないと思います。わたしたちが、毎日、いつ起こるかも分からない自分の終わりを予感している時に、その自分終わりが、やはり主イエスにお目にかかる、そのひとつの道であることは明らかです。＜目覚めて終わりを迎える＞ことができるかどうか、目覚めた思いで終わりを迎えることができるか、終わりにおいても目を開いて見るべきものを見続けているか、そういう賢さを持っているか、ということです。

このイエスさまの譬え話が、何よりも主イエスがもう一度来られるという＜再臨＞について語っておられるということは、はっきりしています。わたしたちの教会の信仰にとってひとつ大事なことは、イエスさまがまた来られるということを感じるということです。ですからクリスマスは、そのことを確認

する時でもあります。ただ、これは必ずしも簡単なことではありません。お互いにどうもぴんと来ないこと、一番難しいこと、少なくとも、まだどうも、はっきりしないと思ってしまう信仰の事柄のひとつだと思うからです。

けれど、イエスさまがここで勧めておられることは、わたしたちが神経質に、いつイエスさまが来られるか分からないと、苛立ったり、いきり立ったり、焦ったりすることではない。繰り返して申しますが、この賢いおとめたちは、居眠りすることができました。いつでも目を覚ますことができる用意をしながら、居眠りをする自由を持っていました。イエスさまがここで勧めておられるのは、わたしたちが始終目を開いて、いつも神経質に、「主は近い、主は近い」と叫び続けることではなかったのです。そうではなくて、何年でも教会が目を覚まし続けて生きる生き方であった、と言ってよいと思います。ただ問題は、そういう眠りの間でも、いつもで、自分のともし火に火を灯すことができるということです。いつもで、細くても自分

のともし火を、ともし続けるということです。

ただ一方でこの譬え話は、とても厳しいところがあります。五人の愚かなおとめが、油が無くなりそうになった時に、他の五人に分けてほしいと言いますが、分けて貰うことができませんでした。「分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい」と言われています。ここで文句を言う人は文句を言います。イエスさまはどうしてこんな譬え話をお語りになったのだろうか。そういう時にこそ、五人の賢いおとめは愚かなおとめに油を分けてあげたらいいではないか。それこそ、イエスさまがいつも教えておられる愛の姿ではないのか。けれど、イエスさまはここで、あいまいな姿を語っておられるのではない。ここでイエスさまは、自分でしか灯すことができない、自分ひとりの責任においてでしか、灯すことができない灯りと、その灯りをともす、油を求めておられる。しかも、その油を慌てて買いに行ったおとめたちが戻って来た時に、婚宴の扉はすでに閉まっており、それを再び開け

ることは許されないのです。これもずいぶん厳しい話です。この五人のおとめたちは、他のおとめが一所懸命待つために油の準備をしていたときに、そんな準備をする必要はない、花婿は来ないのだから迎える必要はない、と言ったのではありません。そうではなくて、花婿が来るのを真剣に待った。ただ愚かだった、思慮が浅かっただけです。失敗して、それを反省して油を持って来たのですから、婚宴の席の扉を開いて、今度は勘弁してあげるから次はこういう失敗はしないように、と言って迎えるのが本来のわたしたちのやり方のように思えます。けれどイエスさまは、閉めた扉を開くことができないと言われる。ここにもとても厳しい側面があります。悲しいけれど、イエスさまはいったいどうしてこういう厳しい物語をなさって、何を私たちに求めておられるのだろうか。わたしたちを脅しておられるのだろうか。

この譬え話で語られるともし火、油がいったい何を意味しているのか。昔からいろいろと理解されてきました。祈りの

火であったり、教会員らしい生活である、あるいは隣人を愛する生き方である、と考える人もいました。ただいずれにしましても、それらのどれもあてはまるのではないかと思います。というのも、ここでイエスさまはこのともし火が何か、油とは何かということを何も説明しておられないからです。何も説明しておられないということは、それぞれにふさわしいともし火があることを、それぞれに相応しい油があることを、求めておられるのではないのでしょうか。もちろんここでイエスさまが何を求めておられたかということは、この後のタラントンの譬え、そしてまた羊と山羊を分ける譬えにおいても、はっきりしていると言っていいと思います。けれどここではイエスさまは何もおっしゃっておられない。何も言われなくて、まずわたしたちに、あなたのともし火がともっているか、あなたには、自分のともし火をいつでも、灯すに足るだけの油があるのかと、問うておられる。そして、その時にわたしたちは「わたしには油があります」と答えることができればいいのです。ただそこでわたしたちが覚えておきたいことがあります。それは、ここでイ

イエスさまは十字架に赴かれるのです。十字架に死ぬために、です。「十字架に死ぬために」とは何か。そうしなければ、神さまとわたしたちとの間に、仲直りが成り立たなかったからです。そうしなければわたしたちと神さまとの間に道が繋がらなかったからです。その道を開くために、キリストの灯りがここで一番赤々と燃えています。「私は世の光である」と言われた光が燃えています。クリスマスを待つわたしたちが毎週一本づつろうそくの灯りを増やしていくのも、その光として来て下さる主イエスを待つためであり、その光を、目を覚まして見るためでもあります。その光が灯されているにも関わらず、わたしたちがその火を、ともし火を消してしまっ、見ないことにして、自分にはそんな光は必要はない、灯さなくてもいいのだと言ってしまうのでしょうか。神さまが灯してくださるあかりに似合うわたしたちの灯りを、小さくても貧しくても灯すことを、イエスさまは求めておられるのではないのでしょうか。そして、この主イエスの灯りは、何よりも＜恵みのともし火＞です。

この譬え話については、多くの人が説教したり文章を書いたりしています。ある人は、もっと単純に言えば、愚かなおとめの姿は消して、みんなでキリストを迎えることができるようになる、その姿を描くことこそ、この主イエスの物語を説く道になると言います。どうしてか。主イエスは、わたしたちを脅かしているのではない。このような愚かな道になるなどって、みんなが、賢いおとめとして生きるようになるために、ご自身の<憐れみのすべて>を注ぎ出しておられるのではないか。「主イエスがさばきについて語られる時、その物語はすべて憐れみの物語であることを忘れてはならない」と言います。その通りだと思います。十字架について死なれた主イエスは、わたしたちが、ひとりも欠けることなく、主イエスを迎える日を、いつも待ち望んで生きることを求めておられる。だからこそ、わたしたちは愚かな罪を犯すわけにはいかないのです。天地を造られた神、主イエスをわたしたちのところに送られた神が、わたしたちを捨てておられることはない。わたしたちを死の寂しさの中に、放っておかれることはない。わたしたちをこ

の世にあって、いつも途方に暮れる絶望の中に捨てておかれることはない。教会の貧しさ、愚かさに、嫌気をさしてしまってやけを起こすような状況に、わたしたちを放っておかれることはない。目を覚ましなさい、わたしは来る。その望みに生きなさい。その望みに生きる時、あなたがたは安んじて寝て、安んじて終わりを迎えることができるのではないかと言われます。お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神さま、わたしたちの目を開いてください。賢くしてください。愚かな罪を犯すことがありませんように。この賢さに生きようとするからこそ、人としての務めに喜んで生きることができますように。どんなに小さくても、貧しくても、愛するわざに生き、人に報われなくても、そこに耐えることができますように。どんなに小さな人生でも喜んで生き、喜んで終わりを迎え、イエスさまにお会いする日を待ち望むことができますように。主のみ名によって祈ります。

アーメン

讚美歌 讚美歌 21-573-4 (光かかげよ、主のみ民よ)

献 金 讚美歌 21-65-2

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讚美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>